

ルンペルシュチルツヒェン

RUMPELSTILZCHEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫



むかし、あるところに、こなやがありました。水車小屋でこなをひくのを商売にして、まずしくくらはしてはいましたが、ひとりきれいなむすめをもっていました。

ところで、ひよんなことから、このこなやが、王さまとむかいあつて、お話することになりました。そこで、すこしばかり、ていさいをつくろうため、粉屋はこんなことをいいました。

「わたくしに、むすめがひとりございますが、わらをつむいで、金にいたします。」

王さまは、こなやの話を聞いて、

「ほほう、それはめずらしいげいとうだね。ほんとうに話のお

り、おまえのむすめに、そんなきようなことができるなら、さぞおもしろいことであろう。では、あした、さつそく城へつれてくるがいい。ひとつ、わたしがためしてみてもやろう。」と、いいました。

さて、むすめが、いやおうなし、王さまのところへつれてこられると、王さまは、むすめをさつそく、わらのいっぱいつんであるおへやにいれました。そうして、糸車とまきわくをわたして、こういいました。

「さあ、すぐと、しごとにかかるがよい。今夜からあしたの朝はやくまでかかって、このわらが金につむげなければ、そちのいちはないものとおもうがよいぞ。」

こういいのこして、王さまは、じぶんでへやの戸に、じょうをかかってしまいました。むすめは、ひとりぼっち、あとにのこりました。

さて、むすめは、ぽつねんとそこにすわったきり、いったいどうしたらいいのか、とほうにくれていました。わらを金につむぐなんて、そんなこと、まるでわかりようはありません。だんだん、心配になってきて、とうとう、たまらなくなると、むすめはわつと泣きだしました。

するうち、ふと、戸があきました。ひとり、豆つぶのように小さな男がはいってきて、こういいました。

「こんばんは、こなやのおじよっちゃん、なんでそんなになし

そうに泣きなさるえ。」

「まあ、あたし、わらを金につむがなければならぬのだけれど、  
どうしてするものだかわからないの。」と、むすめはいいました。  
すると、こびとがいました。

「わたしが、かわりに、それをつむいであげたら、なにをほうび  
にくれるえ。」

「この首かざりくびをね。」と、むすめはいいました。

こびとは、首かざりをもらうと、糸車の前にすわりました。ぶ  
るるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、まきわくは、金の  
糸でいっぱいになりました。それから、こびとは、また二ばんめ  
のまきわくをかけて、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわ

すと、三どめで、またふたつめのわくが、いっばいになりました。こうやって、あとから、あとからとやっていくうち、朝になりました。もうそれまでに、のこらずまきわくは、いっばい金の糸になつていました。

お日さまがのぼると、もうさつそく、王さまはやってきて、へやじゆうきらきら光っている金をみて、びっくりしました。すると、よけい、いくらでももつと金がほしくなりました。

王さまは、また、こなやのむすめをもうひとつの、やはりわらのいっばいつんである、しかもずっと大きなおへやへ、つれていかせました。

そうして、こんどもまた、いのちが惜おしかったら、ひと晩でこ

れを金の糸につむげと、いいつけました。

むすめは、どうしていいかわからないので、泣いていますと、  
こんどもやはり戸があいて、そこにこびとが姿をあらわしました。  
そうして、

「わらを金につむいだら、なにをわたしにほうびにくれるえ。」  
と、いいました。

「わたしの指にはめているゆびわ。」と、むすめはいいました。  
こびとは、ゆびわをもらうと、また糸車をぶるるん、ぶるるん、  
まわしはじめました。そうして、朝までに、のこらずのわらを、  
きらきら光る金の糸にしあげました。

王さまは、うずたかい金の山をみて、にこにこしながら、でも、



まだまだそれだけではまんぞくできなくなりました。それで、またまた、わらのいっぱいつんである、もつと大きいへやへ、こなやのむすめをつれていかせました。そうして、

「さあ、今晚のうちに、これをしあげてしまうのだよ。そのかわり、しゅびよくそれをしとげれば、わたしの妃きごいにしてあげる。」と、いいました。

「よし、それがこなやのむすめふぜいであるにしても、それこそ世界じゅうさがしたって、こんな金持の妻つまはないからな。」と、王さまは考えていました。

さて、むすめがひとり、ぽつねんとしていますと、れいのこびとは、三どめにまたやってきて、こういいました。

「さあ、こんどもわらを金につむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「あたし、もう、なんにもあげるものがないわ。」と、むすめはこたえました。

「じゃあ、こういうことにしよう。王さまのお妃におまえがなつて、いちばんはじめにうまれたこどもを、わたくしにくれると約やく束くそくおし。」

（どうなるものか、さきのことなぞわかるものではないわ。）と、こなやのむすめは考えていました。

それに、なにしろせつぱつまつたなかで、なにをほかにどうしようくふうありません。それで、むすめは、こびとののぞむま

まの約束をしてしまいました。そうして、こびとは、三どめにまた、わらを金につむいでくれました。さて、そのあくる朝、王さまはやってきてみて、なにもかも、ちゆうもんしたとおりにいつているのがわかりました。そこで王さまは、むすめとご婚こんれい礼の式をあげて、こなやのきれいなむすめは、王さまのお妃になりました。

一年たつて、お妃は、うつくしい子どもを生ましました。そうして、もうこびとのことなんか、考えてもいませんでした。すると、そこへひよつこり、こびとがへやの中にあらわれて、

「さあ、約やくそく束のものももらいにきたよ。」と、いいました。

お妃はぎくりとしました。こどもをつれて行くことをかんにん

してくれるなら、そのかわりに、この国じゅうのこらざるのたからをあげるから、といつてたのみました。でも、こびとは、

「いんにや、生きているもののほうが、世界じゅうのたからのこらずもらうより、ましじゃよ。」と、いいました。

こういわれて、お妃は、おろん、おろん、泣きだしました。しくん、しくん、しゃくりあげました。それで、こびとも、さすがにきのどくになりました。

「じゃあ、三日のあいだ待つてあげる。」と、こびとはいいました。「それまでに、もし、わたしの名前をなんというか、それがわかったら、こどもはおまえにかえしてあげる。」

そこで、お妃は、ひと晩じゅう考えて、どうかして、じぶんの

聞いて知っているだけの名前のこらざるなかから、あれかこれか、考えつこうとしました。それから、べつにつかいの者をだして、国じゆうあるかせて、いったい、この世の中に、どのくらい、どういう名前があるものか、いくら遠くでもかまわず、のぼせるだけ足をのぼして、たずねさせました。

そのあくる日、こびとはやってきました。お妃は、ここぞと、カスパルだの、メルヒオールだの、バルツエルだの、でまかせな名前からいいはじめて、およそ知っているだけの名前を、かたはしからいつてみました。でも、どの名前も、どの名前も、いわれるたんびに、

「そんな名じゃないぞ。」と、こびとは首をふりました。

ふっか

二日めに、お妃は、つかいのものに、こんどはきんじよを、それからそれとあるかせて、いったい世間せけんでは、どんな名前をつけているものか聞かせました。そうして、こびとがまたくると、なるたけ聞きなれない、なるたけへんてこな名前ばかりよつていいました。

「たぶん、リツペンビーストつていうのじゃない。それとも、ハメルスワーデかな。それとも、シユニールバインかな。」  
でも、こびとはあいかわらず、

「そんな名じゃないぞ。」と、いつていました。

さて、三日めになったとき、つかいのものはかえつてきて、こういう話をしました。

「これといって、新しい名前はいつこうにたずねあたりませんが、  
したが、ある高い山の下で、その森を出はずれたところを、わ  
たくしはとおりました。ちょうどそこで、きつねとうさぎが、さ  
ようなら、おやすみなさい、をいつておりました。そのとき、わ  
たくしはふと、そのへんに一けん、小家こいえをみつけました。その家  
の前に、たき火がしてありまして、火のまわりに、それはいかに  
もとぼけた、おかしなかつこうのこびとが、しかも一本足で、ぴ  
よんぴよこ、ぴよんぴよこ、とびながら、はねまわつておしまし  
た。そうして、いうことに、

きようはパンやき、あしたは酒づくり、

一夜あければ妃のこどもだ。

はれやれ、めでたい、たれにもわからぬ、

おらの名前は、

ルンペルシユチルツヒエン。

と、こうもうしておりました。」

つかいの者の話のなかから、こびとの名前を聞きだしたとき、お妃はまあ、どんなによろこんだでしょう。みなさん、さっしてみてください。さて、そういうそばから、もうそこへ、れいのこびとはあらわれました。

そうして、「さあ、お妃さん、どうだね、わたしの名前はわかったかい。」と、いいました。

お妃はわざとまず、



「クンツかな。」

「ちがうわい。」

「では、ハインツね。」

「ちがうわい。」

「じゃあ、たぶん、おまえの名前は、ルンペルシュチルツヒエン  
。」

「悪魔あくまが話したんだ、悪魔が話したんだ。」と、こびとはさげび  
ました。そうして、腹だちまぎれに、右足で、したか大地をけり  
つけると、からだごとうずまるくらい深い穴あながあきました。それ  
から、いかりたけて、両手に左足をひっぱるひょうしに、じぶ  
んでじぶんのからだを、まっぷたつにひきさいてしまいました。



# 青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ルンペルシュチルツヒェン

## RUMPELSTILZCHEN

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 グリム兄弟 Bruder Grimm  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>